令和5年度

徳島市徳島中学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践
- ・デジタル教材とアナログ教材を効果的に使用
- ・効果的なタブレット活用方法を校内で共有

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員
坂東　重樹 吉浦　早紀	小川善弘（校長）、岩野伸哉（副校長）、富浦美知代（教頭） 上杉享子（教務主任） 岩﨑憲資（2学年主任）、中村陽子（1学年主任）

校長

小川　善弘

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告など、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の（１）～（３）をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

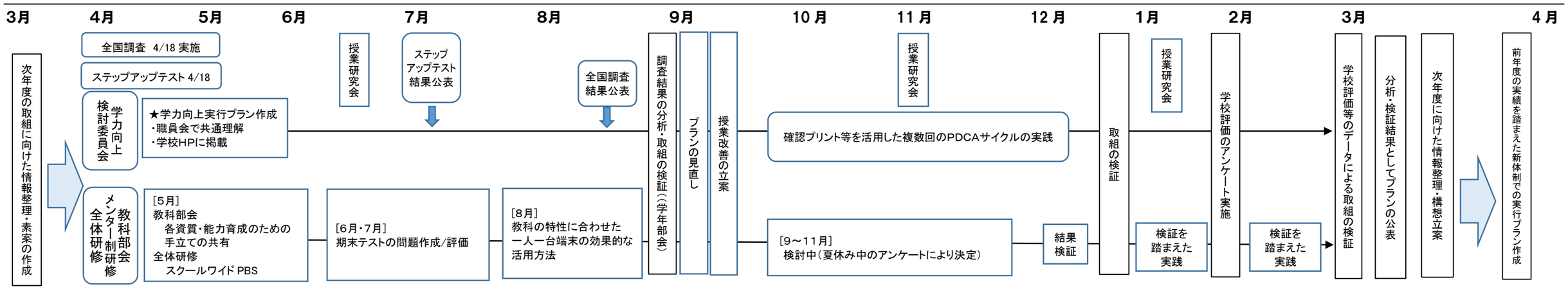
（１）知識・技能の習得

児童生徒の状況（○よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）		次年度における改善事項
○基礎的・基本的な知識・技能が身に付いている生徒が多い。 ●個々の知識量に差があり、長文を正確に読み取ったり、身に付けた知識を関連付けたりすることに課題がある。 ○●授業をだいたい理解できている生徒が8割。できていない生徒が2割。	・各教科に関する個別の知識・技能が身についている。 ・学習の過程を通して習得した知識が、既習の知識と関連付けられ、他の学習の場面で活用することができる。	・各教科に関する個別の知識・技能が確実に定着するように、教科部会で以下について検討し、実践を行う。 ①各教科に関する個別の知識・技能を身に付けさせるための手立て （特に、授業を理解できていないと感じている2割の生徒への具体的な手立て）		教職員	① 知識・技能を身につけさせる手立ての実施 100%（目標指標達成）	教科部会や校内研修でデジタル教材とアナログ教材を効果的に使用する方法を共有し、指導力向上を図ってきた。次年度も生徒が各教科の特性に応じた知識・技能を習得できるように、校内研修を更に充実させていきたい。
				生徒	① 授業が分かる 79.7%（昨年度＋0.1）	

（２）思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況（○よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）		次年度における改善事項
○自分の考えを発表したり、友達の意見を聞いたりすることができる生徒が多い。 ●他者の意見を取り入れ自分の意見をさらに深めたり、相手に伝わる表現を考えて発言したりすることに課題がある。	・各授業（単元）の学習課題に対して、話し合い活動等を通じて新たな見方に気づいたり、考えを深めたりしたことを適切に表現することができる。	・思考力・判断力・表現力等を育成するために、教科部会で以下について検討し、実践を行う。 ①対話的な学びの場の効果的な設定 ②生徒の思考を深めるための手立て （パフォーマンス課題など）		教職員	①対話的な学びの場の設定 92.6%（昨年度＋17.6） ② 生徒の思考を深めるための手立ての実施 92.6%（〃−4.3）	新型コロナの５類移行により、対話的な学びの場が設定しやすくなった。次年度も思考を深める手立てについて、校内研修や授業研究会を充実させ、効果的な指導を共有していきたい。
				生徒	①②話し合い活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる 86.8%（〃＋0.5）	

（３）主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況（○よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）		次年度における改善事項
○授業で与えられた課題に対して、真面目に取り組むことができる。 ●学習課題に対して主体的に取り組んでいると感じている生徒が約7割。感じていない生徒が約3割。	・学習課題に対して、自己調整を図りながら粘り強く考え、自ら取り組むことができる。	・生徒を「認め育てる」積極的・肯定的な学習指導 ・効果的なタブレット活用方法を校内で共有		教職員	①「認め育てる」肯定的な学習指導の実施 100%（目標指標達成） ②タブレットを授業等で利用 74.0%（昨年度＋5.2）	授業でのタブレット使用頻度は年々増加している。次年度も教科の特性に合わせたタブレットの効果的な活用方法を共有・実践し、生徒の資質・能力の育成に努めていきたい。
				生徒	① 学習課題に対して自ら考え、自ら取り組んでいる 71.2%（昨年度＋1.7） ※ 家庭学習時間 1・2 年 1 時間 52 分（〃+1 分） 3 年 2 時間 30 分（〃−16 分）	

令和5年度　学力向上ロードマップ